

アメリカにおける「病」とその「治療法」

—アヤッド・アクタルの自伝的小説 *American Elegies* をめぐって

近藤佑樹

全学共通教育推進機構 専任講師

はじめに

パキスタン系アメリカ人作家アヤッド・アクタル (Ayad Akhtar) が2020年に発表した長編 *Homeland Elegies* は、筆者と同名の主人公が、9.11同時多発テロを大きな転換点として、アメリカで経験した壮絶な日々を描いた自伝的小説である。本作は米紙ニューヨーク・タイムズ (The New York Times) の「2020年のベスト本10冊」にも選出された話題作だ (“The 10 Best Books Of 2020,” n.pag.)。また名門雑誌ニューヨーカー (The New Yorker) にも特集記事が組まれ、トランプ政権下の分断を描いた、回顧録であると同時にフィクションでもある作品として取り上げられている (Schwartz n.pag.)。アクタルは、パキスタンから移住してきた両親、とりわけ父親の人生を読者に少しずつ開示しつつ、アメリカに生まれつつも非白人として容易にアメリカ人として社会に認められづらい本人のアイデンティティの問題にも迫る。

以上のようにアメリカ、そしてアメリカ人として生きようとするアクタルが抱える諸問題を描く本作には、様々な形で病が登場する。列挙すると相当な数になるが、それらを今回の議論では、2種類に大別する¹。まず、実際の病気が挙げられる。アヤッド・アクタルの父親が心臓病の専門医であることを始めとして、アメリカに住むアクタルの人生と病気を切り離して考えることはできない。さらに、1980年代に父親は、深刻な心臓病が疑われるドナルド・トランプ (Donald Trump)、すなわち後にアメリカ大統領になる人物に尽力する。また、アクタル本人は、梅毒に感染したことが第3章で明らかになる。そして、母親は末期がんの患者であり、父親は飲酒依存症であることが示唆される。QT延長症候群という危険な病を巡る訴訟も描かれる。

字義通りの病に加えて、本作では、アメリカにおける病理とも表現できるような、比喩的な病も描かれる。9.11同時多発テロ後のアメリカは、ドナルド・トランプ大統領の誕生に象徴されるように、人種差別主義、拝金主義、そしてアメリカ人であるという

アイデンティティへの固執などの諸問題を抱えている国家として本作で描かれている。

本論は、*Homeland Elegies* を、二重の病と立ち向かう筆者の苦闘として読み解き、その治療法がもしあるとすれば、それが一体何であるのか検討するものである。なお、本文では主人公のアヤッド・アクタルをアクタルと表現する。

1. *Homeland Elegies* と『ヒルビリー・エレジー』

本章では、病の表象について検証する前に、まず本作と、J.D. ヴァンス (J.D. Vance) による回顧録『ヒルビリー・エレジー』、つまり同じくエレジー (哀歌) という単語が用いられている著作のタイトルの意味を比較検討し、現代アメリカ社会において *Homeland Elegies* という一冊の文学作品が占める立ち位置を確認していく²。

『ヒルビリー・エレジー』は、貧窮に苦しむ家族における困難を乗り越えてアメリカン・ドリームを勝ち取るまでの壮絶なヴァンス自身の人生を描いた回顧録である。本書はドナルド・トランプが同年のアメリカ大統領選で勝利を収めた2016年に出版されたこともあって、期せずして「トランプのアメリカ」を鮮明に描いた書物となったと言えるが、2016年時点のヴァンスは “In a sense, Vance was the anti-Trump. He was a true son of Appalachia striving to lift his community, in contrast to the faux populist from Manhattan seeking to flatter and exploit them” (n.pag) というモナ・チャレン (Mona Charen) の分析にあるように、決して親トランプ派ではなかった。チャレンの指摘にあるように、一方でトランプはアパラチア山脈の人々のために努力するのではなく、あくまでも彼らを利用したのに過ぎなかったと考えるのなら、他方でヴァンスは真に彼らに寄り添う存在として見なすことが出来た。しかし、現在のヴァンスはそのスタンスを覆してしまったと言える。彼は実際エリート層の人間でありながら、トランプの支持を得て出馬し、2022年のオハイオ州上院選にて勝利を収め

た (Flegenheimer n.pag.)。もちろん、このような出版後の事実を当時の彼に安易に重ね合わせることは避けるべきだろう。しかしながら、出版当初からヴァンスが自著を通して発信したメッセージと、現実との乖離は既に指摘されてきた (Jones n.pag.)。

このような文脈を押さえた上で、二者のタイトルを比較すると、それだけで多くのことが見えてくる。まず、ヴァンスは自分がアメリカ東部に位置するアパラチア地方のプア・ホワイトの出自を持つことを明示するためにヒルビリー (hillbilly) という、侮蔑的な使われ方もする語をあえて使用している。そこに哀歌という語を付することで、本人は白人という人種のマジョリティに属していてもなお、特有の苦難と哀愁を帯びた存在であり、さらに言えば一種の同情や共感に値する人間であると示すことに成功している、と言えるだろう。

その一方で、アクタルは国籍や他の個人的属性を排したタイトルを用意している。もちろん、これは彼個人についての自伝的小説であるが、その一方で「故郷のエレジー」という意の題は誰にでもあてはまりうるような、極めて普遍的な題である。さらにそのエレジーはヴァンスの場合と異なり、複数形になっている。個人の中でしか完結しえない絶対的な哀愁が存在するかもしれない一方で、多くの人が抱く様々な種類の哀愁がありえるという解釈ができる。

さらに、執筆行為という観点から、簡潔に双方の著作が描く内容の比較を行うと、ヴァンスは自身の経験を一冊の本の中で語るということで『ヒルビリー・エレジー』を生み出している。その一方で、アクタルは *Homeland Elegies* 出版時、既に多くの演劇作品や小説作品を発表し、作家として成功を収めている。彼は作品創作の工程や、それらの作品の発表後のエピソードも本作内で披露している³。ヴァンスは、ノンフィクション作家として、表層的な機会の平等はあったとしても、依然として過酷なアメリカという国の暗部を活写しているが、それは彼の初挑戦である。アクタルは、また別の角度から同様にアメリカの暗部を活写しているが、そういった作品を発表することでどういった反応が生じうるのか、十分に理解した上で本作を執筆していく、という対照的な点を挙げられるだろう。

そして、最重要な点は、『ヒルビリー・エレジー』が「トランプのアメリカ」あるいは「トランプを支持するようになったアメリカ」の内実を、貧困

にあえぐ白人層の視点から描いたと言える一方で、*Homeland Elegies* は、マイノリティでありながらトランプを尊敬する人物が主人公の父親であることに代表されるように、「トランプのアメリカ」に極めて批判的でありながら、それを真っ向から否定できない両義性を抱えた作品であることだ。つまり、トランプなるものが害悪だと主人公で語り手のアヤッド・アクタルは分かっている、その病理から自由になれない父親がいることで常に息子のアクタル本人は葛藤せざるをえないのだ。つまり、本作はある種『ヒルビリー・エレジー』のカウンターとして読めるものの、そこで描かれる関係には二分法では語り切れない複雑さが内在しているのだ。「トランプのアメリカ」で生きていく上で、直面する複層的で複雑な問題の諸相を描いているのが本作の立ち位置であると、本論を進めていく中でまず前提として確認できることだろう。

2. ボックス・アメリカーナ：文字通りの病について

前章ではタイトルの意味について若干の考察を加えたところで、次は先述した2通りの病に関する議論を、具体例をいくつか挙げて進めたい。

本作に説明は特にないが、インタビューにて“Pox Americana”という本作の第2部のタイトルは、ボックス・ローマナ (Pax Romana)、つまりローマによる平和を意味する表現を念頭に置いていることをアクタルは示唆している (Naimon n.pag.)。しかし、ここで注目すべきは、pax が pox に取って代わられている点である。この第2部が“Of the women I slept with during my season of sexual fecklessness, I least expected Asha would have been the one to give me syphilis” (175) と、アヤッドが梅毒 (syphilis) に感染したという告白の一文から始まるように、このタイトルがアヤッドの梅毒を指しうることに間違いはないだろう。しかしながら、Pox Americana という表現の指す範囲の広さにも着目すべきだ。この一語から、かつて革命時にアメリカで蔓延した天然痘 (small pox) を想起することすら可能であろう (Fenn 3)。そう考えると、アメリカという国はその起源から常に病と隣り合わせにその歴史を築いてきたと言え、アメリカを病なしに語ることは難しいとも言える。

そんなタイトルを持つ本作では様々な病を描いて

いるが、一見無関係に思えるものが対となって描かれていることが考えられる。本章では、セットとして検討できる4種類の病に焦点を定める。まずは、母親の末期がんと主人公の梅毒である。一見共通項が見出しづらいものかもしれないが、アクタルは2つの症状を並置させている。

自分が梅毒に感染したことの疑いが語られるこの第6章において、アクタルの母親は化学療法も止め、がんは全身に広がっており、激痛に苛まれていた(215)。そんな中、アクタルは病室のベッドで寝ている母親の横で、突然梅毒の症状のため、勃起してしまう。死と性をめぐる2つの現象が極めてぎこちない形で並置されている状況で、アクタルは“imagining the inner landscapes of others and drawing their portraits -- ultimately -- from the model I knew best: myself. I knew I was mostly staring in a mirror as I watched my mother die” (216) と、似ても似つかぬ身体的状況にある母を観察する語り手はそこに自らの鏡を見出している。

そんな二人が交わす最後の会話は、母がパキスタンから異国の地アメリカに幼い息子を連れて来たことの後悔についてである(218-219)。アクタルはアメリカで住むことになったのは決して過ちではなかったと言葉を返し、また自分の小説の題材は自ら選ぶのではなく、題材が自分を選ぶのだ、と言った後で母親は再び眠りにつく。

次に、別のペアとして考察できるのが、父親の飲酒依存症とも思わしき症状と、QT延長症候群(QT syndrome)である。本文の記述によると、QT延長症候群とは、心拍の間隔が通常よりも長くなり、心臓が不規則に鼓動することを指すもので、場合によっては突然の死をもたらしかねない病気のことである(249)。2012年にQT延長症候群を持つ26歳の妊婦が、心臓の専門医である主人公の父親に、接種薬についての助言を求める。そこで彼は一旦薬の接種を止めてみるのはどうか、と助言したところ、その妊婦が突如病死し、父親はまもなく訴訟される。

父親は、自らの医師生命を守るために裁判所で自らの無実を証明する必要に迫られる。あくまでも事実をその場で伝えれば勝ち目はあるはずであることが本作で描かれる。しかしながら、父親は裁判初日の段階で既に酔っており、自ら状況を悪化させている。その晩、カジノで泥酔していることを知ったアクタルは父親を快方しなければならぬ、という皮

肉な状況がここで生じている。全くの素人である主人公が医者父親の快方をしなければならぬのだ。さらに、彼は極めて定型的な形で飲みすぎではないことを強調し、息子に悪態をつく。例えば、翌日出廷しないといけないことをアクタルが伝えると父は“I said: *You don't tell me!* You're not the parent!” (291)と逆上する。親の理想像を示すどころか、感情的になり、親として横暴な態度しか示せない状況の皮肉さが示される。つまり、医者であっても世の中には治せない病があるし、トランプの心臓病を治し、彼の命を救ったと言える父ですら、自らを蝕むアルコール依存には勝てないのだ。

この2つのペアを比較検討すると、それぞれが持つ共通の特徴を抽出することができる。がんやQT症候群は死をもたらす病であり、本作において両者とも仮定上の死ではなく、現に実際の死をもたらしている。その一方で、本作におけるアルコール依存や主人公の梅毒は、たしかに決して軽視できないものの、少なくとも作中人物の生命をただちに絶つことはない。しかし、当事者はそれらの現象を決して一過性のものとして軽視することはできないし、今後の人生にも影響を与えるものとして考えていく必要があることは指摘できるだろう。すなわち、母親の死、そしてQT症候群による妊婦の突然死という、大きな出来事にアクタル父子が直面する一方で、本当は自分たちの病にも目を向けなければならないという構図が浮かび上がってくる。そして、アクタルが描くこの後者の類の病と、比喩的な病には相通するものがある。次章ではその点について検討していく。

3. 終わらないボックス・アメリカーナ：比喩的な病について

前章では、文字通りの病とは、主人公アクタルを巡るネガティブな状況から目を背けさせるものではなく、むしろ密接に関わりを持ちうることを確認してきた。ここで次に、その状況、換言すれば比喩的な病がどのような形で本文に書かれているのか検証する。本議論では、拝金主義、消えないレイシズム、「アメリカらしさ」に対する強迫観念という3点に焦点を当てる。まず、拝金主義についてだが、これはアメリカという国の特性と強く結びついた問題として本作では描かれる。第1章の冒頭では、早速アクタルの父親とトランプが、1980年代に借金

の問題を抱えた存在であるという共通項が言及される(3)。また、借金が膨れ上がることを受けて、精神状態の悪化も進むトランプは、トランプ・タワーから出てこなくなり、ウエストも肥大していた、とアクタルは語る(3)。大金でもって自らのアメリカン・ビジネスをさらに拡大させようとしたトランプの試みが失敗したことを踏まえれば、この時点で金へのこだわりは、借金や精神状態という不可避な負の側面と隣り合わせであることを本作の冒頭描写を一読するだけでも読み取れる。先述したように、主人公の父親は、物語の大部分でトランプを擁護し続ける。それは、アメリカの経済的活力や、アメリカン・ドリームと呼ばれる成功神話をトランプが体現しているように父親には見えていると取れる。

このように冒頭の描写のみを検討するだけでは、アクタルは観察者として、そういった病理的ある程度の距離を置いていると推察できるかもしれない。しかしながら、本作は、トランプや父親が象徴するものに批判的であるはずの主人公ですら、アメリカの病から自由にはなれないことを示している。第5章では、リアズ・ラインド(Riaz Rind)というヘッジ・ファンドの経営者に主人公は出会う。リアズによると、ローマ人たちは“the corporation”(144)というシステムを構築することで、人々の資産をさらに増やすことに成功した。しかし、“Because Muslim laws were trying to take care of wives and children! We’re behind because we cared more about what happened to people than money!”(145)と、イスラム教徒たちは、金よりも人を優先した結果経済的に発展することが出来なかったと強弁する。リアズのレトリックは、生身の人間よりも、確固たる形を持たない金へのこだわりを持つことが善であることを説いており、拝金、つまり金を拝むことを肯定していることが伺える。そして、リアズの金の妄執が正当化されてしまうのは、それが人種やエスニシティを巡る対抗手段として動機づけられるからなのだ。

そんな甘い言葉をささやくリアズとアクタルは共に過ごすようになり、アクタルも富める者の仲間入りを果たすことになる。しかし、自治体規模でリアズが行った詐欺が発覚し、彼の欺瞞が明らかになる。著者のアヤッド・アクタル本人は、金融という、大金がさらに大金を生みだすシステムに憑かれた1980年代のアメリカを風刺する演劇作品 *Junk*

(2017)を発表した。そして、本作におけるアクタルは、その作品内容に該当するであろう *Merchant of Debt*、つまりシェイクスピアの『ヴェニスの商人』ならぬ『借金の商人』という作品を *Junk* と同時期に発表し、注目を集めることになる。自らの過ちを振り返り、設定を変えつつもアメリカの金融という根深い問題に切り込んでいったことが伺える。

次に、人種差別問題を一種のアメリカの比喩的な病理として検証する。パキスタンにルーツを持ち、イスラム教徒の家庭で育ったアメリカ人として、レイシズムの問題はアクタルにとって避けては通れない問題である。本作では特に2001年のアメリカ同時多発テロ及びドナルド・トランプ大統領誕生という二大事件がアメリカにおけるイスラムフォビアを増大させたことが読み取れる。テロ事件の当日、アクタルは急ぎの用のため外に出る。しかし、ニューヨークの街では、アクタルは単なる一人のニューヨーカーではなく、テロリスト扱いされ、「お前たちのような奴らは殺せるときに殺しておくべきだった」と極めて差別的な発言を浴びせられる(202)。そのとき失禁までしてしまったアクタルの感情は“I couldn’t tell you if it was anger or fear”(202)と、容易に名指せない感情に見舞われることになる。

レイシズムを巡るこのような詳細な体験の描写は他の箇所にも確認できる。後述するように、本作のエピローグで登場する会話部分が一例として挙げられる。別の例は、トランプ大統領就任後、アクタルと彼の父親が車で訪れたとある店で経験する口論を巡るものである。ここでもアメリカ市民である二人は、金髪に男に駐車も満足にできないサル呼ばわりされる(306)。去り際にその男は“Can’t wait when we build that wall to keep you critters out”(307)と、トランプがメキシコとの国境に建設すると豪語していた壁に恐らく言及している。二人の出身国や、アメリカの地理を少しでも考えれば彼の発言は全くもって間違いだと指摘はできるだろうが、この壁とは、物理的な壁というよりも、非アメリカ人と見なされる人々を排除する象徴であることが伺える。ここでトランプを擁護し続けた父親は、トランプの差別的発言がもたらす脅威を身をもって経験することとなるのだ。

そして、このアメリカにおける人種差別と、アクタルの父親に対して主人公が抱える悩みを並置させると、両者は、「アメリカ人らしさ」に対する強迫

観念という同根を有していることが見えてくる。つまり、前者の場合、偏見に基づく限定的な「アメリカ人像」を形成し、それを死守するために少しでもそのイメージに該当しないアメリカに住む人々を「非アメリカ人」として排除する現象が生まれる。これは当然トランプ大統領のレトリックにおける論理でもある。心臓病、つまり命を脅かす文字通りの病は治してもらえたトランプであるが、彼の比喩的な意味での病が全く治っていないと言えるのは本作における最も大きな皮肉の一つであろう。後者の場合でも、「アメリカ人らしさ」に執着するあまり、トランプのような人物に対する憧れを捨てきれずにいる。このように、アクタルが観察しうる範囲の諸問題は比喩的な病としてカテゴライズすることができ、その病はアメリカに存在し続けている。

4. アクタルによる「治療法」

これまで、本作における病の表象を分類することで、本作の通奏低音を成す現象に光を当てて議論を進めてきた。そこで、病という概念が本作における重要なテーマだと提起できるとすれば、その一方で想起しうる、治療法という概念を見出せるのだろうか。そのヒントは本作のプロローグとエピローグに読み解くことが出来る。前者は「序曲：アメリカへ」(“Overture: To America”)、後者は「言論の自由：終結部」(“A Free Speech: Coda”)と題されており、音楽用語という点において、本作のタイトルに用いられているエレジーと呼応する表現が選ばれている。本文における他の部分とは異なり、アクタルがプロローグとエピローグにて直接的な形で描出するのは、母校の教員であるメアリー・モローニ教授(Mary Moroni)から教わった、アメリカの文化人による哲学ないし思想である。この箇所がアクタルの家族史をより大きな文脈に接続させ、アヤッド・アクタル本人の葛藤にアメリカ、あるいはアメリカ人とは何か、という問いを付与させていると考えてよいだろう。この箇所ではアメリカが生んだ詩人の代表格であるウォルト・ホイットマン(Walt Whitman)の名が挙げられる。

本作のエピローグでは、モローニ教授のゼミの様子が描かれる。学生たちはホイットマンの評論集 *American Vistas* (1888) について議論を交わしている。ここでホイットマンが問題視するのは、物質至上主義的なアメリカ社会であるが、それは極めて今

日的な問題でもある。

Back then, Whitman worried American's preoccupation with the business of making money would lead to the failure of its historic political mission. On his *remedy*, the students were less agreed. Most thought Whitman naive to believe that future American poets and writers could inspire the nation to a nobler idea than money, something higher that could inspire us all to put our material abundance to more generous use. Some of the students did not believe there was a *remedy*; for them, the die was cast. For the others, the looming climate change would provide the necessary larger idea. Change was coming to the system because it would have to. (340, emphasis mine)

ここで注目すべきは、ホイットマンではなく、アクタル本人が“remedy”という単語を2度用いているということだ。この文脈において、まさしく比喩的な意味における「治療法」を指す単語である。金へのこだわりに対する手段が「治療法」なのであれば、その問題はやはり「病」と表現できるような現象だということである。そして、ホイットマンが自著で論じていた治療法とは以下のようなものである。

I suggest, therefore, the possibility, should some two or three really original American poets, (perhaps artists or lecturers,) arise, mounting the horizon like planets, stars of the first magnitude, that, from their eminence, fusing contributions, races, far localities, &c., together they would give more compaction and more moral identity, (the quality today most needed,) to these States, than all its Constitutions, legislative and judicial ties, and all its hitherto political, warlike, or materialistic experiences. (Whitman 9)

つまり、ホイットマンは、素晴らしき詩人が立ち上がれば、その力はアメリカ憲法を含む政治機構を

凌駕し、解決策をもたらしてくれることを示唆している。簡略化すれば、政治や経済よりも、文学こそがアメリカの病に対する薬になれるということだ。しかし、先の引用にある通り、一部の学生にとって解決策は存在しえない。

ホイットマンの、救世主として詩人、もしくは拡大解釈して作家が効力を持たないのであれば、何が治療法たりえるのだろうか。アクタルの周辺に立ち返って考えるならば、それは一つとして、アメリカ以外の故郷に戻ることもなかもしれない。本作の最終章では、アクタルの父親はパキスタン行きの飛行機に搭乗し、アメリカに戻ってくることはなかったことが明かされる。これは排外的な思想を持つアメリカ人にとって好都合な判断だと解釈することもできるが、少なくとも父親にとって帰郷とは、前章で触れた、アメリカなるものへの執着という病から解放されることを意味する。アクタルが *“As much as he'd always wanted to think of himself as American, the truth was he'd only ever aspired to the condition. Looking back, he realized he'd been playing a role so much of that time, a role he'd taken for real”* (333, emphasis original) と語るように、父はアメリカ人なるものを希求したのは、アイデンティティ的な問題というよりも、社会経済的状况の問題であったことが伺える。付言すると、9.11によって、アメリカの民間人に対する大量殺戮兵器と化した飛行機という存在が、この文脈ではテロリズムという脅威から自由になり、父親の帰属意識に安定をもたらす交通手段として本来の機能性とイメージを取り戻しているとも考えられる。少なくともこの瞬間において、アメリカが抱える問題は前景化されてこないのである。

それでは、アメリカに留まることを選ぶ人々にとってはどうなのか。アクタル本人の問題に翻って考えると、彼は学生たちの諦念的な現実主義とホイットマンの力強い理想主義との狭間にいると考えられる。今までの議論で言及してきたように、アクタルはアメリカにおける金に妄執する人々の暮らしを、例え一時期であっても享受したことを明らかにしている。その一方で、彼も一人の劇作家兼小説家であって、書くという力に背中を押されて執筆していると言える。

もちろん、この *Homeland Elegies* という作品そのものが一つの治療法 (remedy) だとアクタルは明言

しない。ただ、フィクションの世界に逃げ込むというより、自分が今生きているアメリカの現実と向き合うことでアクタルは作品を生み出している。その結果として治療法がもしあるとすればそれが何であるのか、彼が執筆行為を通じて検討している可能性はあるのではないか。そして、その検討した結果浮かび上がってくる概念が、教育及び対話である。この場合、教育とは、先述した大学キャンパスで行われるものがその代表例である。例え悲観的な観測を学生たちが議論にて示していたとしても、彼らの中で建設的な意見が交わされていることは事実であり、そういった鋭い思考を持つ若者たちにある種の希望を見出しているのは、アクタルもモローニ教授も同じである (340)。

そしてこの場合の対話の一例として挙げられるのが、本作の最後の場面での公開イベントでの議論である。モローニ教授とアクタルが二人でトークセッションを行った後、学外の聴衆の一人が、アメリカに問題があることを言うのであれば、なぜアメリカから出ていかないのか、という趣旨の問いをアクタルに投げかける。そこで彼が *“I'm here because I was born and raised here. This is where I've lived my whole life. For better, for worse --- and it's always a little bit of both --- I don't want to be anywhere else. I've never even thought about it. America is my home”* (344) と返答する本作最後の数行に、自分の居場所がどこであるべきなのか、という問いに対する答えは明確に示されている。良きにつけ、悪きにつけ、ここが自分のホームであることは不動の事実なのだから、他の場所に移り住むという選択肢はありえないのだ。アクタルの最後の一言は、パキスタンに帰った父親が息子に残した *“I'm grateful to America. It gave me you! But I'm glad to be back in Pakistan, beta. I'm glad to be home”* (333, emphasis original) という言葉と強く共鳴するところがある。

もちろん、アクタルの力強い反駁を促したのは、極めて陳腐な質問であることも忘れてはならないだろう。移民としてのバックグラウンドを持つアメリカ人に対して、出身の地と思わしきところに戻れ、という表現が今なお聞かれるということは、レイシズムという病理が未だに治っていないことを読者に思い出させる。しかしながら、対話なくして解決の道筋は見いだせない。このアクタルの考えは、学生

たちの憤りに対して理性的な形で応答しようとした彼の判断にも見出せるだろう。議論を少し戻すと、アクタルと父親の関係性も、口論が絶えず、決して良好で健全だったとは言えないものの、少なくともその父子の対立構造は、概ね率直な会話があったゆえ、読者が知り得たことである。父親は問題含みで、息子も決して完璧ではないものの、対話を継続することで、父親は自らの病なるものに気付き、それに抗うための行動を取ることが出来た。特效薬はないにせよ、病にはまず真摯に向き合うところから始めるしかないのだ。

おわりに

本論文では、*Homeland Elegies* のタイトルの意味からその議論を始めた。続いて、アメリカにおける病を、文字通りの病と比喩的な病とに二分し、それがどのようにテキスト内で立ち現れるのか、そして両者はどのような形で関わりを持つのか、分析した。そして、アメリカの比喩的な病に対する治療法について検証した。

社会問題の解決策を一冊の長編小説から見出すという試みは、あえて文学作品に対して行うべきことであるのか、という反発を生むかもしれない。たしかに、本作はジャーナリストや歴史家などによるノンフィクションではない。しかしながら、*Homeland Elegies* は、回顧録というノンフィクションの要素と、家族小説というフィクションの要素を混ぜ合わせることで、事実のみを忠実に綴る、という規制から自由になった作品だと言える。そして、その結果、これまで議論してきたアクタルの思想はこの形式であったからこそ、本作から見出すことが出来たとも考えられる。そのような意味において、アクタルが生み出したこの作品は文学ならではの一種の達成であったと言える。

脚注

1. 字義的か比喩的かという、この区分による議論については、近藤 (2021) によるフィリップ・ロスの後期作品に関する議論を参照。なお、フィリップ・ロスは、本作の語り手であるアヤッド・アクタルが影響を受けた作家としてその名が挙がっている。
2. アクタルとヴァンスとの著作のタイトルを比較検討している出版済の書評は管見の限りほとんど見当た

らなかったが、例えばヴァンスの著名を想起した匿名ブログ *The Reluctant Psychoanalyst* の投稿は確認できる。

3. ただし、自伝的な要素が色濃い本作において、全てを事実に基づいたものだと解釈し、本作の語り手と著者本人とをイコールで結びつけることが適切だとは言えない。例えば、著者アクタルとのインタビューで、聞き手のデイビッド・ネイモン (David Naimon) も、何が実際にあったことなのか、という詮索はしておらず、例えばアクタル本人も、本当に梅毒にかかったのか、あるいは父親がトランプの医師だったのか、という点に関して明言は避けている (Naimon n.pag)。

Works Cited

- Akhtar, Ayad. *Homeland Elegies*. Little, Brown and Company, 2020.
- . *Junk*. Back Bay Books, 2017.
- Charen, Mona. "J.D. Vance Joins The Jackals." *The Bulwark*, 2021, <https://www.thebulwark.com/j-d-vance-joins-the-jackals/>. Accessed 13 Dec 2022.
- Fenn, Elizabeth A. *Pox Americana: The Great Smallpox Epidemic of 1775-82*. Hill and Wang, 2002.
- Flegenheimer, Matt. "J.D. Vance Gets What He Came For In Ohio, No Elegy Necessary." *The New York Times*, 2022, <https://www.nytimes.com/2022/11/09/us/politics/jd-vance-ohio-senate.html>. Accessed 18 Jan 2023.
- "Homeland Elegies: Grief is the difficult pathway to healing..." *The Reluctant Psychoanalyst*, 2022. <https://thereluctantpsychoanalyst.blogspot.com/2022/06/elegies-ayad-akhtar-psychoanalysis.html>. Accessed 17 Jan 2023.
- Jones, Sarah. "J.D. Vance, The False Prophet Of Blue America." *The New Republic*, 2016, <https://newrepublic.com/article/138717/jd-vance-false-prophet-blue-america>. Accessed 13 Dec 2022.
- Kondo, Yuki. "Corporeality during Wartime in Philip Roth's Late Works." Dissertation, 2021.
- Naimon, David. "Between The Covers Ayad Akhtar Interview - Tin House." *Tin House*, 2022, <https://tinhouse.com/transcript/between-the-covers-ayad-akhtar-interview/>. Accessed 12 Dec 2022.
- Schwartz, Alexandra. "An American Writer for an Age of Division." *The New Yorker*, 2020. <https://www>

newyorker.com/magazine/2020/09/21/an-american-writer-for-an-age-of-division. Accessed 19 Jan 2022.

“The 10 Best Books Of 2020.” *The New York Times*, 2020, <https://www.nytimes.com/2020/11/23/books/review/best-books.html>. Accessed 11 Jan 2023.

Vance, J.D. *Hillbilly Elegy: A Memoir of a Family and Culture in Crisis*. HarperCollins, 2016.

Whitman, Walt. *American Vistas*. Walter Scott, London & Toronto, 1888.

Zhou, Li. “J.D. Vance’s Pivot To Trumpism Pays Off With Ohio Senate Win.” *Vox*, 2022, <https://www.vox.com/policy-and-politics/23448706/midterm-elections-2022-results-ohio-senate-jd-vance-win-trump>. Accessed 5 Jan 2023.